

江戸最古の流儀志賀山流に見る足遣いの特色

Features of Foot movement (Ashi-zukai)
in “Shigayama-ryu”: An oldest “Ryugi”
in Edo period Dance

佐藤 節子¹⁾
Setsuko Sato

1. 目的

「娘道成寺」²⁾は、今日の歌舞伎舞踊の中で、最も上演回数の多い大曲だと言われている。多彩な場面から構成されている華やかさや、テーマの普遍性が、広く人々に愛されている所以であろう³⁾。この演目に至るまでには、数々の演目を経る必要があり、白拍子ものの系譜の1つである「浅妻船」⁴⁾を経るという事が一般的である。^{5) 6)}

演目の修得の過程を、江戸最古といわれる志賀山流の場合に見ると、初心者はず「文がやりたや」⁷⁾という手ほどきものから始める。この1曲の中には、歩き方、おすべり、足拍子、扇子の使い方等、日本舞踊を始めるのに必要な基本が織り込まれている。次に修得するのは、「香に迷う」「わがもの」といった手ほどきものであり、その後は、年令と技術の差によって、一人ひとりの能力に沿った演目を修得する。こうした過程を経て、入門から5年目位に「浅妻船」を、20年程で「娘道成寺」を修得するのである。

日本舞踊では、足遣いよりも、顔や手の表情に目を奪われがちであるが、踊りの大家7代目三津五郎が、師匠花柳勝次郎のもとで、「踊りには両足を遣ってはいけない。左右いずれかの足を中心にしないではいけない⁸⁾」と学んだ事からも、足遣いの重要性がわかる。

本研究では、足遣いに着目し、日本舞踊の一流派の手ほどきもの「文がやりたや」で学ぶ基本的足遣いが、中級者向きの「浅妻船」や上級者向きの「娘道成寺」において、どのように変化するのか、その過程を明らかにし、併せてその意味を探る。

2. 方 法

次のような手法で、各演目の足遣いを比較した。

(1) 演目の収録

「文がやりたや」「浅妻船」「娘道成寺」の各演目は、第5～7回志賀山流古典研究会（1985～1987、於国立劇場演芸場）の稽古と本番を、ビデオと16ミリフィルムで収録した。

比較する部分を選び出すために、本研究では、小道具を持たない手踊りを取り上げた。「文がやりたや」と「浅妻船—手踊り」は、心情の表現よりは、踊りそのものを重視する踊り地である。「娘道成寺—手踊り」は、構成上は恋する女の心情を表現するクドキの部分だが⁹⁾、志賀山流の場合、踊り地に近いと判断した¹⁰⁾。従って、「文がやりたや」「浅妻船—手踊り」「娘道成寺—手踊り」の3曲は、手踊りであり、しかも心情表現よりは踊りそのものを重視するという点で共通しており、比較する上での共通の下地があると考えられる。

(2) 記譜法

「文がやりたや」, 「浅妻船—手踊り」, 及び「娘道成寺—手踊り」の足遣いを比較するため、動きを記譜した。

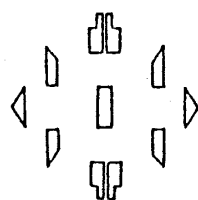
記譜法は、ラバノーテーションを用いた。ラバノーテーションの特徴は、時間の流れの中で、身体各部位の空間的变化を記録できる事にある¹¹⁾。図1は、ラバノーテーションの主な記号の説明、及び主な足遣いを記号化した図である。又、図2～4は、各曲の記譜である。

(3) 比較の視点

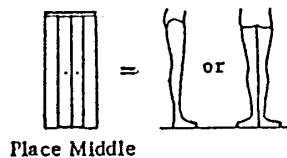
記譜を基にして足遣いの時間的、空間的变化を捉えるため、足遣いを構え、座り、歩行、おすべり、足拍子、回転の6種類に分類し、演目ごとの時間配分を量的に比較した。また、6種類の足遣いの変形を演目ごとに分類し、一覧にして比較し、さらに足遣いの左右の優先回数を演目ごとに比較した。

図1 主な記号の説明及び主な足遣いの記号化

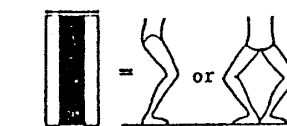
The Eight Main Directions



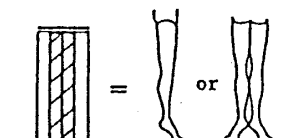
Forward Backward
 Left side Right side
 Left forward diagonal Right forward diagonal
 Left backward diagonal Right backward diagonal



Place Middle



Place Low



Place High (on demi-pointe)



束の足
(両足をそろえ、腰
を落して構える)



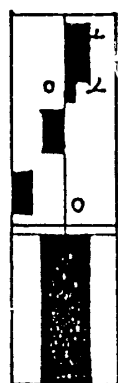
前構え
(右足を前にして
構える)



すり足
(足の裏全体で右、
左と2歩進む)



おすべり
(左足を踏んで、
右足を引く)



足拍子
(左足をはずむ
ように踏む)



けり上げ
(左かかとを踏んで
すぐ同じ足をける
ように上げる)



けり出し
(右足を踏んで
左足を勢いよ
く出す)

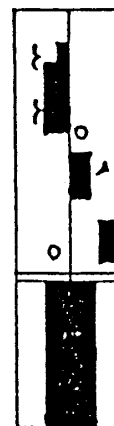


図2 「文がやりたや」の記譜

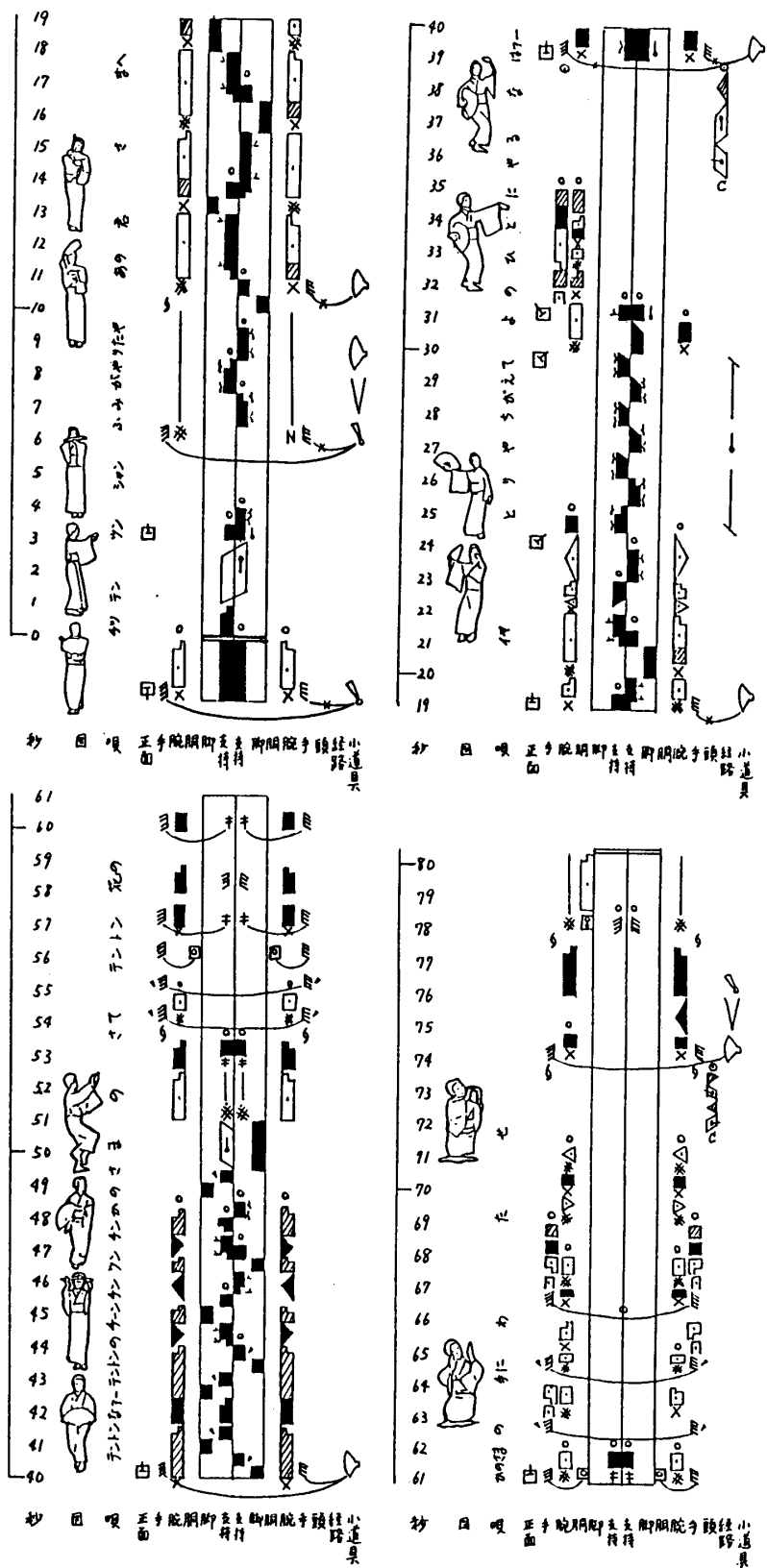


図3 「浅妻船一手踊り」の記譜

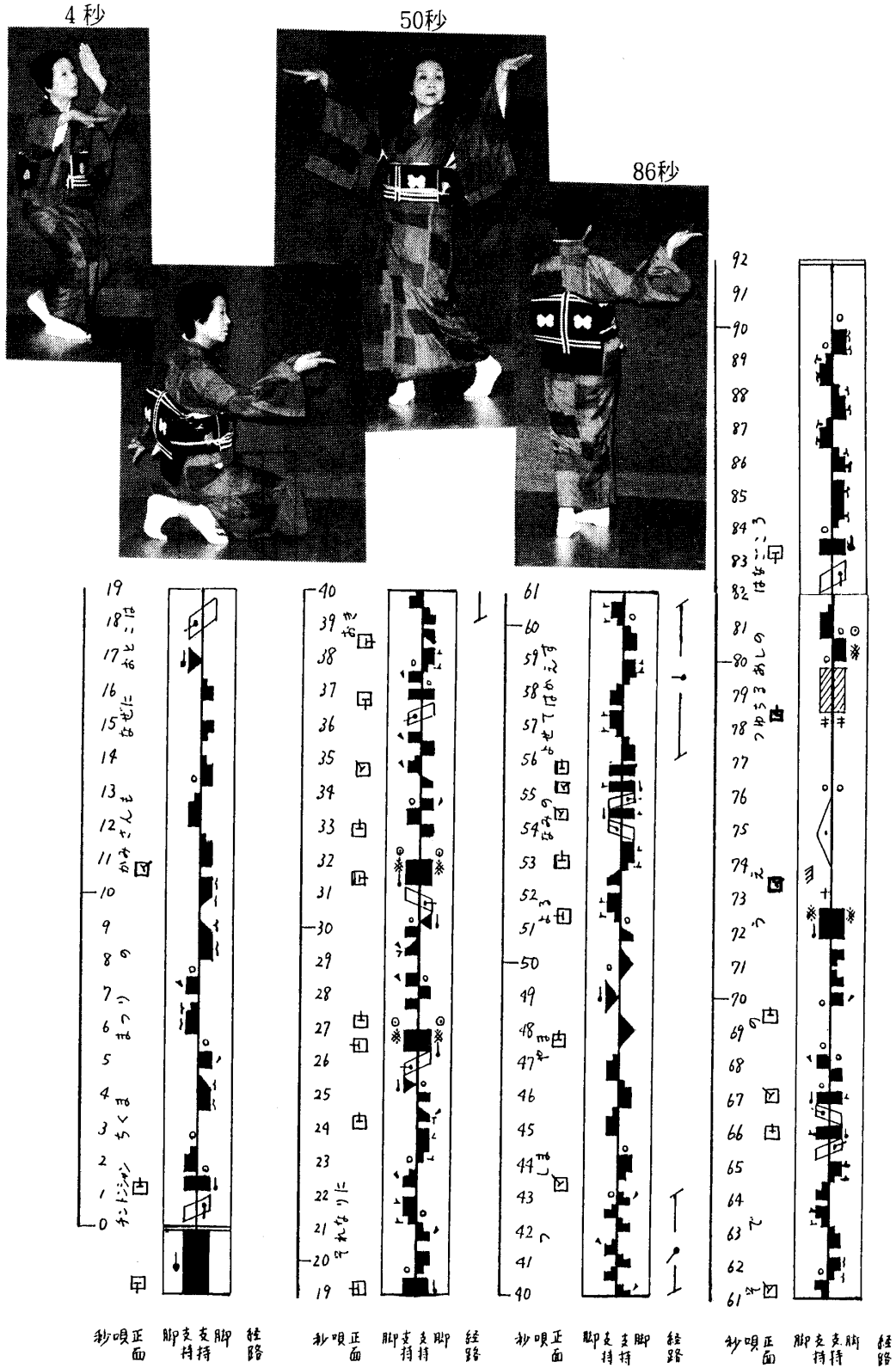
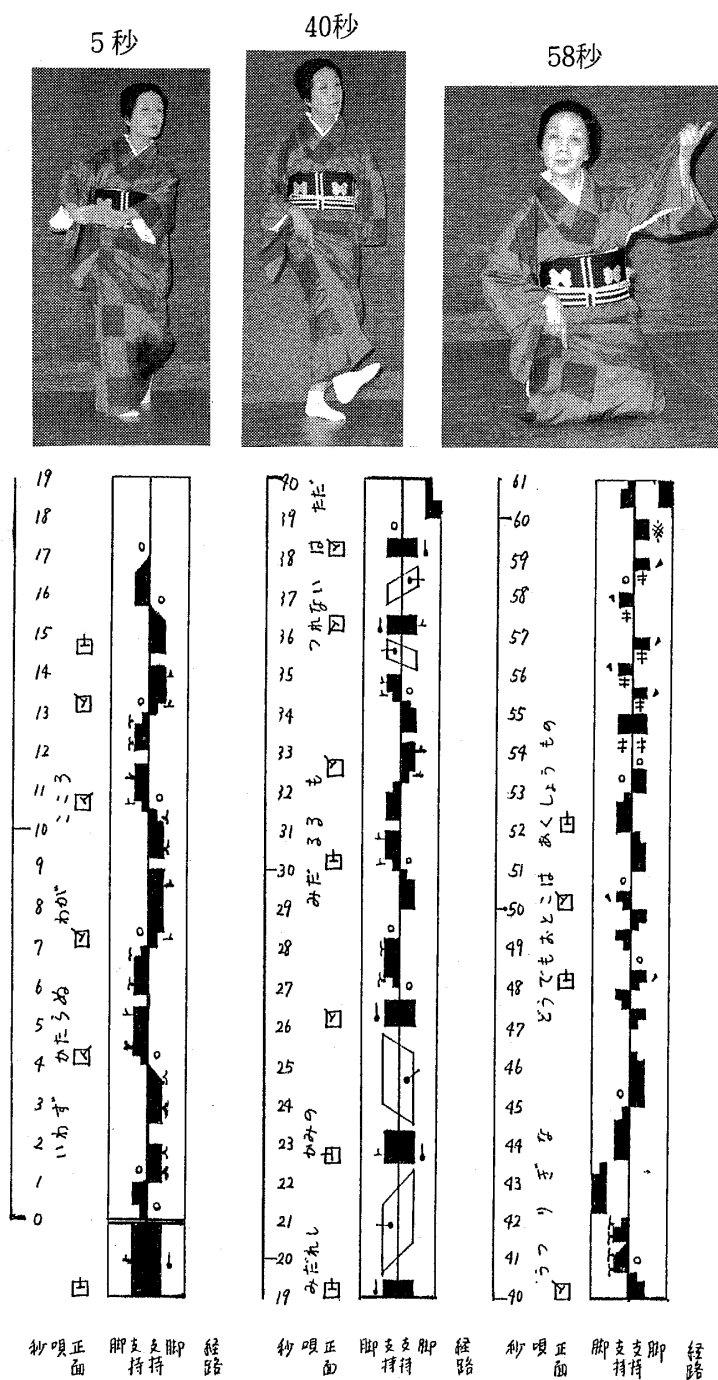


図4 「娘道成寺-手踊り」の記譜



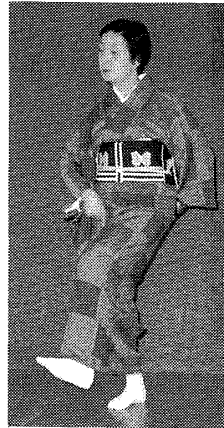
江戸最古の流儀志賀山流に見る足遣いの特徴

82秒

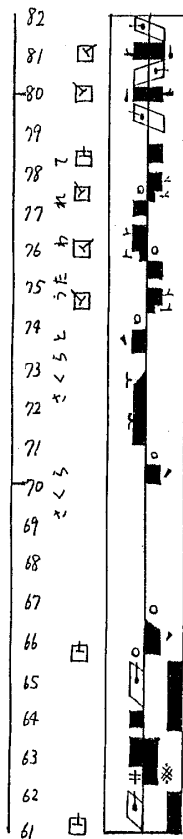
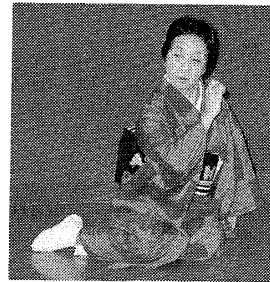
67秒



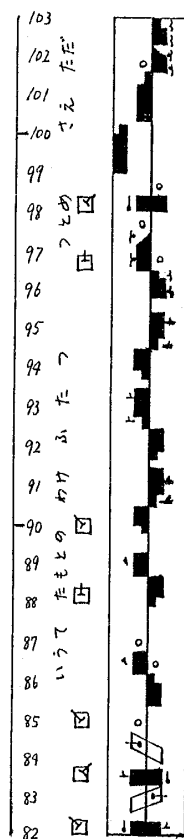
107秒



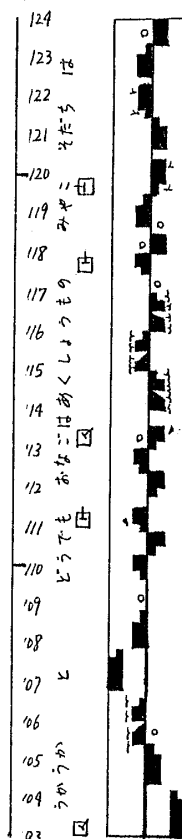
136秒



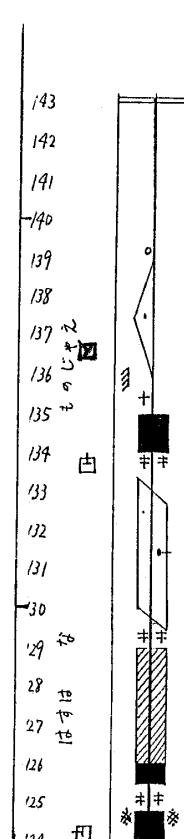
秒 頃 正 面 脚 支 持 脚 経 路



秒 頃 正 面 脚 支 持 脚 経 路



秒 頃 正 面 脚 支 持 脚 経 路



秒 頃 正 面 脚 支 持 脚 経 路

3. 結 果

(1) 足遣いの時間配分

図5 足遣いの時間配分

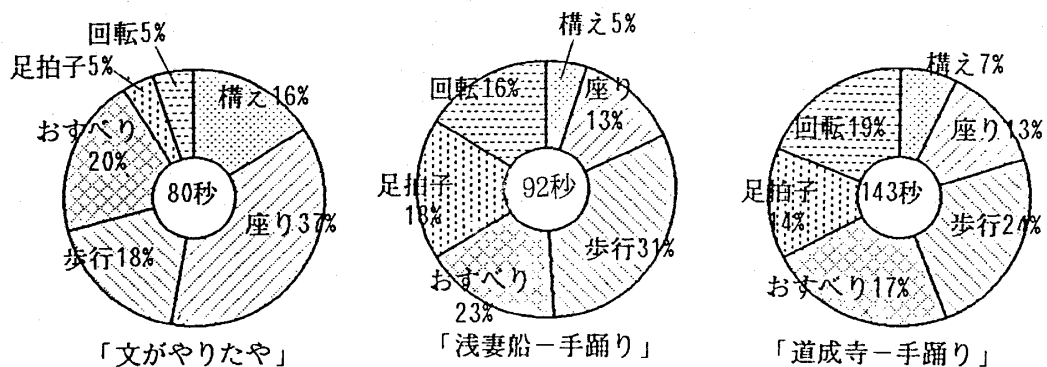


図5は、6種類に分類した足遣いの各演目における所要時間の割合を百分率で示したものである。構えと座りは一定の姿勢を保つ足遣いだが、「文がやりたや」では、この静止した足遣いは53%も占めているのに対して、他の2曲では、18%、20%と少ない。その代わり、動きを伴う足遣いの占める割合が多く、特に足拍子と回転は、「浅妻船一手踊り」では34%、「娘道成寺一手踊り」では33%であるのに対して、「文がやりたや」では9%と少ない。

(2) 足遣いの変形

表1の左端から2列目の縦の欄は、6種類の足遣いごとに、その変形を一覧にしている。ここではこの縦の欄に着目し、足遣いの変形を演目ごとに比較する。

① 構え

構えの変形は、3曲共、束の足と前構えの2種類である。

② 座り

「文がやりたや」の座りは、正座のみであるのに対して、「浅妻船一手踊り」には横座り、しゃがみ、両膝立ての3種類、「娘道成寺一手踊り」には横座り、正座、しゃがみ、両膝立ての4種類がある。

③歩行

「文がやりたや」には、すり足前進、すり足後退、すり足大まわり、及び普通歩行前進の4種類がある。「浅妻船一手踊り」には、すり足前進、すり足後退、普通歩行前進、普通歩行後退、及び送り足の5種類がある。「娘道成寺一手踊り」には、すり足前進、すり足後退、普通歩行前進、普通歩行後退、八文字、八文字の変形の6種類があり、特に、八文字というS字状にすり足で進む足遣いのある点が、他の2曲とは違う特徴である。

④おすべり¹²⁾

「文がやりたや」には、その場所のおすべりの1種類がある。「浅妻船一手踊り」には、その場所、前進、大まわりの3種類のおすべりがある。「娘道成寺一手踊り」には、前進のおすべり、おすべり風の後退、八文字風のその場所のおすべり、八文字風の前進のおすべりの4種類があり、特に、S字状に方向を変えながらの八文字風おすべりのある点が、他の2曲とは異なる特徴である。

⑤足拍子

「文がやりたや」の足拍子にはトン¹³⁾の1種類がある。「浅妻船一手踊り」には、トン、トコトン¹⁴⁾のその場所、トコトンの大まわり、けり足¹⁵⁾、けり上げ¹⁶⁾の5種類、「娘道成寺一手踊り」には、トン、トコトンの後退、けり足、膝でトコトンの4種類がある。

⑥回転

「文がやりたや」の回転には、方向転換と片足回転の2種類、「浅妻船一手踊り」には、方向転換、両足回転、ひねりの3種類、「娘道成寺一手踊り」には、両足回転、片足回転、ひねり、両膝回転の4種類がある。

表1 足遣いの左右の優先回数

足遣い	変形	文がやりたや			浅妻船一手踊り			道成寺一手踊り		
		右	両方	左	右	両方	左	右	両方	左
構え	束の足	0	3	0	0	3	0	0	2	0
	前構え(前足)	1	0	0	0	0	2	4	0	3
座り	正座	0	1	0	0	0	0	0	2	0
	膝立ち	0	0	0	0	1	0	0	1	0
	横座り(上足)	0	0	0	1	0	0	1	0	0
	しゃがむ(前)	0	0	0	1	0	1	2	0	0
歩行 (先行足)	すり足前進	1	0	0	2	0	0	1	0	0
	すり足大回り	0	0	1	0	0	0	0	0	0
	すり足後退	1	0	2	2	0	1	0	0	2
	普通歩行前進	1	0	2	5	0	1	4	0	1
	普通歩行後退	0	0	0	4	0	0	0	0	1
	送り足	0	0	0	1	0	1	0	0	0
	八文字	0	0	0	0	0	0	1	0	0
	八文字の変形	0	0	0	0	0	0	1	0	1
おす べり (先行足)	その場所	2	0	0	0	0	1	0	0	0
	前進おすべり	0	0	0	3	0	0	0	0	1
	大回り "	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	後退 " 風	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	八文字風	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	八文字風前進	0	0	0	0	0	0	2	0	0
足拍 子(先行足)	トン	1	0	2	2	0	5	1	0	3
	けり上げ	0	0	0	1	0	1	0	0	0
	トコトン	0	0	0	1	0	1	0	0	0
	トコトン回り	0	0	0	1	0	0	0	0	0
	トコトン後退	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	けり足	0	0	0	1	0	0	1	0	0
	膝でトコトン	0	0	0	0	0	0	1	0	0
回転 (先行方向)	方向転換	1	0	0	2	0	0	0	0	0
	両足回転	0	0	0	3	0	1	1	0	1
	片足回転	0	0	1	0	0	0	0	0	2
	ひねり	0	0	0	1	0	1	0	0	2
	両膝回転	0	0	0	0	0	0	0	0	1
合計		8	4	8	32	4	16	21	5	21

(3) 左右差

表1は、足遣いの左右の優先回数を記したものである。

左右の優先の判断の基準は、前構えとしゃがみは前に出る足、横座りは上に置く足、歩行・おすべり・足拍子は先行する足、回転は先行する方向とした。

左右の優先回数を合計した結果、「文がやりたや」は右8：左8、「娘道成寺—手踊り」は右21：左21となり、左右をほぼ均等に用いるのに対して、「浅妻船—手踊り」は右32：左16となり、右が多い。また、足遣いごとに見ると、「浅妻船—手踊り」では歩行と回転において右が著しく多く¹⁷⁾、「娘道成寺—手踊り」では回転において左回りが著しく優先している。

4. 考 察

「娘道成寺—手踊り」の歩行とおすべりの変形には八文字が多いが、この曲線的な足遣いは、より女らしさを強調した表現である。「浅妻船」では、あまり色気などを出さぬように踊るのがよいとされており¹⁸⁾、志賀山葵も、白拍子ものは男装している事から、男っぽく踊ると考えている。「娘道成寺」が白拍子ものであるにも関わらず、女らしさを出すのは、娘の恋心を表現するためだと考えられる。「娘道成寺」では、外見は男装した白拍子、中身は女の恋心という複雑な表現が要求されているのである。

次に「浅妻船—手踊り」における右足優先という結果について考察する。

D. モリス¹⁹⁾は、行動学的見地から左利き右利きに注目しており、人類の身体の一方の側への偏りは、幼児期の初期に始まり、8歳になると永久的状態に固定する。また、大多数は右利きであり、言語的にも、右には正しいという意味があるのに対して、左利きを意味する言葉には、侮蔑的な内容が含まれている、としている。

音楽研究家クルトザックス²⁰⁾は、身体の左右について注目し、文化史的な調査をしたパコフェンの例を挙げ、「左側を好むのは女性が文化の重要な位置を占める場合、…右側を好むのは男性が重要な位置にある場合」と指摘している。また、宗教学的には、エリアーデ²¹⁾は、ヨーガにおいて右の脈は太陽、左の脈は月を意味すると述べており、ボージン²²⁾は、「背面と左側は過去、退化、無意識の世界あるいは始源を意味し、前部と右側は未来、進化、意識、すなわち開かれた世界を意味する」としている。

いずれも、身体の右は正の意味に対して、左は負の意味を持ち、右は男性に対して、左

は女性の意味が示されている事がわかる。これらの見解から、白拍子のものの系譜の一つである「浅妻船」での右足や右回りの優先は、男性優勢の文化の一つの象徴であると考えられ、同じ白拍子ものである「娘道成寺」は外見は男の姿を借りながらも、内面は女の表現である事から、左回り優先であると考えられる。

5. まとめ

日本舞踊の一流派の初級（「文がやりたや」）、中級（「浅妻船」）、上級（「娘道成寺」）の各演目における足遣いに着目し、時間的、空間的比較を行なった結果、初級の演目では静止した足遣いの時間が長く、単純な足遣いが多い。一方、中級、上級の演目では動きを伴う足遣いの占める時間が長く、かつ足遣いの変形の数も多く、動きも複雑である事が明らかになった。

また、「浅妻船」では右足と右回転を優先する事で男らしさを表現し、「娘道成寺」では八文字歩行と八文字風おすべり、及び左回転の優先によって、男の姿を借りた女の情念を表現していると考えられる。このように、日本舞踊の稽古の過程で取り上げる演目のうち、白拍子ものの系譜では、男性的表現を経てから「娘道成寺」に見られるような複雑な女の情念の表現へと進む事が必要とされているのである。

今後の課題として、足遣いの左右の優先回数に関する考察を一般化するには、更に多くの演目について検討を加える必要がある。

6. 注 釈

- 1) 本研究は、志賀山葵氏（舞踊家）及び石黒節子氏（お茶の水女子大学助教授）との共同研究として行われた。
- 2) a. 本田安次監修「日本舞踊大鑑 第一巻 別冊付録 華耀百姿型付覚書」創紀房新社 昭55 p.158
b. 郡司正勝編「日本舞踊辞典」東京堂出版 昭和52 p.274
c. 江口博監修「日本舞踊全集 第五巻 演目解説V」日本舞踊社 昭和56 p.107
「娘道成寺」の筋は、道成寺伝説の後日譚という形を取っており、白拍子に化けた

清姫の亡霊が、道成寺に鐘供養があると聞き、舞に事寄せて、かつて男を隠した恨みの鐘に飛び入り、蛇体になって現れる。女形舞踊の集大成ともいえる曲で、現在でも舞踊界最高の演目として上演されている。初演は宝暦3年（1753）、中村座で中村富十郎が演じた（上演時間60分）。

テクニックだけではなく、鐘への恨みの執念など、よほどの周到な研究と精神がないと、的確に踊りこなせない演目である。

3) 渡辺保「娘道成寺」駸々堂 昭和61 p. 16, 34, 472～485

4) 前掲書(1)a. p. 12 (1)b. p. 7

「浅妻船」は、近江の琵琶湖の東岸の港町、浅妻の遊女が、烏帽子、水干姿で舟に乗って出るのをいう。元禄期に英一蝶が画題に取り上げたのを契機に有名となり、以後舞踊に多く取り入れられるに至ったが、本曲はその代表作品と言える。初演は文政3年（1820）、江戸中村座で三世坂東三津五郎が演じた（上演時間23分）。

5) 前掲書(1)c. 第一巻 p. 44

花柳昌太郎は、「『浅妻船』は『道成寺』を下敷きにして造られた舞踊とされますので『道成寺』へすすむ前にお稽古をするべきものと私は思っております」と述べている。

6) 志賀山葵は、「娘道成寺」を踊るには、「汐汲み」「浅妻船」「男舞」を修得しておく必要があると考えている。

7) 前掲書(1)a. p. 132 (1)b. p. 328 (1)c. p. 95, 100～101

一般に「文がやりたや」は、「羽根の禿」の中に入っている。「羽根の禿」の初演は、天明5年（1785）、江戸桐座にて、三世瀬川菊之丞が演じた。

しかし、これ以前に「文がやりたや」は「もしほ草」とも「室町」とも言い、初期歌舞伎の小舞16番の中にあった。小舞16番というのは、若衆歌舞伎以来、寛永延宝の頃の舞踊、今から350年程前のおどりの基本となった小舞を表8番裏8番あわせて16番に組み合わせたものである。

志賀山流では、約280年位前から手ほどきものとして行なわれており、古い伝承を残すと言われている。

8) 蘆原英了「舞踊と身体」新宿書房 1986 p. 285, 289

9) 「浅妻船」の構成は、鼓と扇（オキ、出）―手拭（クドキ）―手踊り（踊り地）―羯鼓（ヤマ）―振鼓（早間）―扇（チラシ）である。「娘道成寺」の構成は、乱拍子

(出) —中啓(出) —手踊り(クドキの前提) —鞠唄(クドキ2) —花笠(クドキ3)
—手拭(クドキ, ヤマ) —羯鼓(踊り地) —振鼓(踊り地) —鐘入り(チラシ) である。

10) 前掲書(2) p. 480

渡辺保は、志賀山流の「娘道成寺」について「歌詞の意味や劇的な設定と無関係かつ無意味な振りがそのほとんど全てである」と述べている。

11) a. Ann Hutchinson "Labanotation The System of Analyzing and Recording Movement" Theatre Art Book, 1970 p. 14

b. ルドルフ・ラバン著 神沢和夫訳「身体運動の習得」白水社 1985 p. 41~43

12) おすべりとは、左足から始まる場合、まず右足を踏んで左足にそろえ、次に左足を後ろに引く足遣いである。

13) トンは一方の足で一踏みする。

14) トコトンは、中弱強と3回交互に踏む。

15) けり足は、右から行なう場合、まず右足を踏んで左足にそろえ、左足を前に出す足遣いである。

16) けり上げは、一方のかかとで一踏みし、すぐにその足のかかとで前にけり上げる足遣いである。

17) 志賀山葵は、水に関する演目、例えば「汐汲み」も、右が多いと考える。

18) 前掲書(1)c. 第一巻 p. 35

19) デズモンド・モリス著 藤田統訳「マンウォッチング 人間の行動学」小学館 昭55 p. 284~287

20) クルトザックス著 小倉重夫訳「世界舞踊史」音楽之友社 昭55 p. 193~194

21) ミルチャ・エリアーデ著 立川武蔵訳「エリアーデ著作集第10巻 ヨーガ2」せりか書房 1981 p. 58~59

22) M. ボージン著 市川雅訳「イメージの博物誌2 —神聖舞踏—」平凡社 1977 p. 54

7. 参考文献

(1) 志賀山葵「日本舞踊技法講座」邦楽と舞踊 第31巻9号~第34巻4号 1981~1984

- (2)志賀山葵・石黒節子「日本舞踊の基礎的技法について」舞踊学第7号 1984 p.38
- (3)志賀山葵・石黒節子・糟谷節子「稽古の修得過程に見る舞踊美の形成について」舞踊学第9号 1986 p.32～33